

【論文】

辜鴻銘と財団法人大東文化協会

—日本滞在と講演活動—

浅沼薫奈

はじめに

辜鴻銘ここうめい (Gu Hongming, 1857-1928) は清末民初に活躍した思想家であり、東西文明や中国伝統文化に通じた中国人学者として知られる。英語、ドイツ語、フランス語などに精通していたとされ、中国文で発表した論稿類のほか英文を中心とした欧文での著作を多く残しており、20世紀初頭の近代中国における代表的な知識人の一人と評される。辜鴻銘といえは「復辟」「蓄妾」など独特の思想を抱き、辮髪べんぱつの風貌もあって「変わり者」という印象があるかもしれない。しかし、財団法人大東文化協会の招聘により行われた日本での講演活動やその講演内容などは、中国の伝統文化を尊重するとともにその文化を「正統的」に継承した日本という見解を説くもののほか、国際的な視野にたちつつ東西文明の比較を広く行ったものも多く見られた。つまり、辜鴻銘の日本への招聘やその講演内容などをあらためて明らかにすることは、20世紀初頭の日中文化人たちの思想の一端を把握することにもつながると考えられる。ただし、辜鴻銘の活動は多岐にわたっており¹、各国を巡ったその生涯や抱いた思想は複雑で決して単純に解せるものではない。加えて、複数の言語で論稿を発表していることや当時の中国事情も相まって、辜鴻銘の思想を含む研究成果の全容を明らかにすることは困難なものとなっている。現在までに中国国内でもいくつかの論集や評伝が刊行され、馮天瑜『辜鴻銘文集』（岳麓書社、1985年）や黄興涛『文化怪傑辜鴻銘』（中華書局、1995年）、黄興涛『辜鴻銘 —文化怪傑辜鴻銘評伝—』（知書房出版社、2001年）などによりその功績が評価されてきているものの、辜鴻銘の思想解明や活動

内容のすべてが明確になったとは言い難い。

特に、辜鴻銘の生涯を見たとき、日本に滞在していた期間の活動や日本人との交流が辜鴻銘へ与えた影響は大きいものがあったが、この間の活動の詳細はこれまでほとんど言及されてこなかった。なかでも芥川龍之介との邂逅は比較的よく知られるところであるが、そのほかにも日本人の吉田貞（貞子）を妻としたこと、財団法人大東文化協会の招きによって日本各地を遊説したことなど、辜鴻銘と日本との関係は親密であった。なお、同時代に日本で刊行された書籍は『辜鴻銘講演集』（1925年、大東文化協会編）のみであったが、辜鴻銘の死から10年以上後の1941年に薩摩雄次編『辜鴻銘論集』（皇国青年教育協会）が発刊されている。この2つは辜鴻銘が日本で講演したものから代表的なものを選び日本語で記録したもので、日本滞在中の思想解明の基礎資料となる。ただし、後者は前者の抜粋を多く含む内容である。同著の編者である薩摩は辜鴻銘の日本在留期間において秘書兼通訳の役割を担っており、ほぼ全行程に付き添った人物であった。

本稿では、辜鴻銘の日本への招聘を担った大東文化協会と、日本滞在中の活動や講演内容などから、日本へ与えた影響や辜鴻銘自身の日本観などを明らかにすることを試みる。

1. 辜鴻銘略歴

辜鴻銘は1857年、英領マラヤのペナンで生まれた。鴻銘は字、本名は湯生である。父は福建省出身の中国人で当時はゴム農場の管理人をしており、母はポルトガル人、辜鴻銘は南洋華僑の子であった。

幼少期は現地の西洋学校で学んでいたが、1867年にゴム農場のオーナー²に連れられ父母とともにスコットランドへ渡った。1870年にエジンバラ大学附属高校へ進学、1873年にエジンバラ大学本科へ入学した。大学では主として西洋文学を学び、1877年に同大学大学院へと進み1879年に文学修士を取得した。この間、ドイツおよびフランスへ遊学し、パ

りでは法学を学び、ドイツのライプツィヒ大学において土木工学の博士号（あるいは修士）を取得したと日本滞在中に辜自身が発言したこともあったようだが、在籍記録は正確には確認できない。ただし、帰郷後に5年ほど植民地政府につとめたのは、特に工学の知識技能を買われたからであると説明している。辜鴻銘の経歴として一般的に工学博士が指摘されることはほぼないが、のちに上海黄浦江浚渫局局長となったことから工学に関する高度な知識は持っていたことは確かであろう。

1880年に23歳でペナンへ帰郷、植民地政府につとめるようになった一方、この頃より次第に中国伝統文化の研究に傾倒するようになった。また語学力と西洋知識が評価され、1885年以降およそ20年にわたり清国の政治家・張之洞³の秘書官兼通訳として仕えた。日本人の吉田貞と結婚したのは同時期の1889年であった。この間、張の影響を受け儒学をはじめとする中国の伝統文化をより深く理解する機会を得て、東西文化、東西文明の比較研究を行うようになった。四書のうち『論語』『中庸』『大学』を英訳し発表したのも同時期の仕事である。1905年には上海黄浦江浚渫局局長に、1908年には宣統帝の即位にともない外交部侍郎に、1910年には上海南洋公学（現在の上海交通大学）監督に就任するが、1911年の辛亥革命によって公職をすべて辞すこととなった。革命期には「特殊の用を帯びて」来日し東京に数日滞在したと本人が回顧している記録⁴もあるが、来日の理由や滞在期間など詳細は不明である。その後、1915年に北京大学教授となったが、1923年には学長免責問題を抗議する形で辞職した。なお、芥川龍之介が辜鴻銘を訪ねたのは1921年であったので北京大学教授のころである。芥川は辜鴻銘を評して「ヤング・チャイニーズとは異り、西洋の文明を買い冠らず、基督教、共和政体、機械万能を罵る次手に、僕の支那服を着たるを見て、『洋服を着ないのは感心だ。只憾むらくは辮髪がない。』と言ふ」⁵と面会時の思い出を述べている。

辜鴻銘が初めて公的に東京を来訪したのは、1924年10月10日のことであった。同年9月に鷺澤與四二⁶の推薦によって、当時朝鮮総督であつ

た齊藤實^{まこと}⁷の招きにより北京から京城へ来遊しており、その際に日本への招聘が望まれ実現したものであった。下関から日本へ入り、10月10日に東京に到着しているのも、下関には前日までに着いていたと思われる。このとき、日本への招聘を主として担ったのが財団法人大東文化協会（以下、大東文化協会あるいは協会と略することがある）であり、その中心となったのは江木千之であった。

辜鴻銘は10月14日より早速、大東文化協会主催の講演活動を開始した。大東文化学院講堂での講演を皮切りに、東京および大阪を中心とした講演活動を終え、11月16日には東京を離れ、18日までに台湾へ到着し、台湾の実業家で親戚でもある辜顕栄に請われて台湾に滞在した。

その後、辜鴻銘が再来日したのは、帰国からおおよそ半年を経た1925年4月末のことであった。5月1日に妻子を伴って⁸東京へ到着、帝国ホテルに滞在しつつ、翌日の5月2日より講演活動を開始している。この来日および講演活動も大東文化協会があらためて正式に招聘し実現したものであった。先の来日時に大東文化協会を信頼した辜鴻銘は、日本に定住するつもりで来日した後に麹町区平河町に住居を定め、大東文化協会比較研究部の名誉会員として講演活動を開始、あわせて大東文化学院臨時教授にも就任した。

同年5月中には「東北五県巡回講演」を実施し、その旅程を終えて帰京の途中、新潟の宿舎滞在中に張作霖からの電報を受け取った。政治顧問の要請を受け、同年6月下旬に薩摩雄次をともなって満洲へ赴き張作霖と4回ほど会談したとされる。結果的に張作霖からの要請を固辞した辜鴻銘は7月に日本へと戻り、大東文化協会主催の講演活動を中心に行いつつ2年余り日本に滞在した。1927年7月に大東文化協会名誉会員および大東文化学院臨時教授の職を辞し、台湾を経由して中国北京へと帰国、同年中に山東大学学長に就任するが、その8か月後の翌1928年4月に死去した。なお、日本を離れた理由が山東大学学長就任のためであったのかは判然としていない。

辜鴻銘の妻は日本人であった。名前を吉田貞（貞子）という。貞がどのような人物であったのか、これまでほとんど明らかにされてこなかった。限られた資料しか残されていないため、貞についてわかることは断片的である。辜鴻銘が吉田貞と出会ったのは張之洞に仕えていたところで、二人は武漢で出会い 1889 年に結婚、結婚後は上海に移り住んだ。子は男子 1 人であったとされるが、詳しくはわからない。制度外ではあるものの一夫多妻を是とした⁹ 辜鴻銘にはほかにも子がいたことに加え、貞が早世した後に妻を迎えている。1925 年の来日時に同行したのは次女であったとされるので貞との子ではなかったかもしれない。ただ、来日にあたって歓迎会の写真に写る娘は日本風の着物姿であり、芥川龍之介が辜鴻銘と会った 1921 年、辜鴻銘の傍らにいた「八、九歳の少女」が娘であり、辜鴻銘に促されて恥ずかしそうに「いろはにほへとちりぬるをわか…」と言ったのを聞き、「既に鬼籍に入」っている「夫人の生前教えたるなるべし」¹⁰と述べている。

貞はもともと薩摩藩士の娘であった。士族であった貞の父は維新を境に生計を立てるため、鹿児島を離れ大阪心斎橋の商人となった。商売拡張のために中国有数の商業の街である漢口へと渡った貞の両親は、同地で昆布などを扱う乾物問屋を営んだが、この事業は成功したようで暮らし向きは豊かであった。現地で教育を受けて育った貞は、日本語はもちろん中国語や英語も堪能で、その立ち居振る舞いは毅然とした「日本婦人の典型」¹¹であったという。辛亥革命の際には「北京に赴き清朝のために盡し、袁世凱を倒さなければならない。日本婦人は夫の不在中身を守る事厳にして子どもは立派に教育し、人から指一本さされる様なことはしない」¹²と革命がおきてなお上海に留まる夫に迫ったという。この頃、貞と辜鴻銘は数日ほどであったが林という偽名を使い東京に滞在したとされる。いずれにせよ、貞の存在が辜鴻銘の生涯に大きな影響を与えていたことは明らかで、妻の故郷である日本への憧れを抱かせ、定住することを決意させることとなり、辜鴻銘に日本の婦人道、武士道へ強い関

心を抱かせることとなった。

2. 財団法人大東文化協会による日本招聘とその目的

前述したように、辜鴻銘は北京大学教授の職を辞した後、1924年10月10日に下関を経て東京へと到着した。これより先の同年9月、従前より懇意にしていた鷺澤興四二が辜鴻銘を推挙し、齊藤實朝鮮総督の招きによって辜は北京から京城へ20日間ほど来遊した。その際、その博学ぶりを間近で見て知り日本への招聘が望まれるようになったとされる。このとき、大東文化協会を中心として招く案が浮上した。

大東文化協会はもともと1923年2月に漢学振興を唱えて発足した任意の学術団体であり、同年3月には帝国議会によってむこう10年間の国庫補助を受けて運営されることが決定した。同年9月に財団法人となることが認可され活動が本格化すると、大東文化学院（現在の大学文化大学の前身）運営を主軸としつつ、東洋芸術や学術の研究、講演会の主催、出版など多角的に活動を展開した。協会における「寄附行為」中、第二條には「本会ハ東亜固有ノ文化ヲ振興スルヲ以テ目的トス」とあり、さらに同條の一に「皇道ニ遵ヒ及国体ニ醇化セル儒教ニ拠リ国民道義ノ扶植ヲ図ルコト」と目的に掲げていた。つまり、同協会は日本的な理解のもと根付いてきた漢学のなかでも特に儒教および東洋文化の振興を目的に掲げていたのであった。

大東文化協会初代会頭は司法大臣や鉄道大臣などを歴任した大木遠吉、同副会頭には同じく司法大臣や鉄道大臣などを歴任した小川平吉のほか、文部大臣などを歴任した江木千之が着任した。しかし、大木や小川に比べると江木は大東文化協会内では目立った活動をほとんど行っておらず、辜鴻銘の招聘がもっとも大きな動きであったということが出来るだろう。前述したように、最初期の大東文化協会の運営は国庫補助を受けた「半官半民」であり、「同氏（辜鴻銘 引用者注）は中国における碩学としてその名声たる噴々たるものがあり、本協会の招聘は東洋文化振興に一大炬

火を点じたものというべきである」¹³とあるように、中国古典に学び旧来の漢学者の要請をあらためて行いたいとする大東文化学院の趣旨や大陸理解へを深めたい当時の日本社会の世相に辜鴻銘の思想や活動は合致したもので、講演活動の後援も自然な成り行きであったとしている。また、江木が招聘した経緯については次のような描写が残されている。

「本会前会頭大木伯爵が未だ御存命中、江木千之翁から先生を日本に招聘し其の説を同志に聴かしめてはという提議をした時、理事会満場一致の賛成を得て先生を招聘することになった。当時、先生は北京大学に教鞭を執られ、傍ら新聞等により、自ら『清朝の遺臣なり』と称して東洋文化のため万丈の気を吐いておられたが、先生の先室が日本人であった関係もあり、一度日本を訪れ親しく亡室の霊を弔いたいという心と、日本に現存せる唐宋文化が如何に見事に花咲けるかを研究したいという心から、直ちに吾等の懇請を快諾され、超えて大正十三年の秋来朝されることとなった」¹⁴

これに基づけば、辜鴻銘自身の目的としては、亡妻の故郷を見ることと同時に「日本に現存せる唐宋文化」の研究を行うべく来日を承諾したということになる。また、江木千之は辜鴻銘の招聘の理由について次のように述べている。「儒教は本来我が国のものではないが、流入既に三千年を経て我が国体と融合し国民道德の根本をなしてゐる。彝倫を扶掖し綱常を維持するの途は之を鼓吹し振作するを以て他には絶無であると信ずる、それ等の意味からして、支那現代の大儒辜鴻銘を招聘」¹⁵することに意義があったとしており、古来中国文化を探究したいとする双方の目的は一致したのであった。また、辜鴻銘を紹介して、「先生の日本好き、日本最良と云ふことは往々外国人の中に見る所の尋常の例とは全く其趣を異にし、実に重大なる意義を有して居るのであります。即ち、世界文化に大関係を有して居るのであります」¹⁶と述べ、他国からの侵攻を防ぎ侵

略を許さずに続いている日本は「唐時代の文化は完全に継承せられ、今尚立派に存在発達して居る」ことから、「日本文明の精華をして少くとも之を東洋一般に光被せしむることは日本の天職であると、斯様に観て居られるのであります。即ち、我々協会の意見と大体に於て一致するのであります」と辜鴻銘と大東文化協会との見解の一致する点を説明している。なお、江木千之といえ、官僚、貴族院議員、政治家などとして著名であるが、1924年当時は清浦奎吾内閣の総辞職にともない文部大臣を辞し、枢密顧問官となった時期であった。他方、齊藤實は1919年より1927年まで朝鮮総督をつとめていたが、齊藤と江木との関係は政治の上ではほとんど見当たらない。

一方、当時の大東文化協会は機関誌『大東文化』を刊行しており、日本到着時には早速「碩学辜鴻銘氏来る」¹⁷とした特集記事を掲載している。それと前後して、雑誌『大東文化』には時期を違えて計5号に辜鴻銘の関連記事が掲載された。「碩学辜鴻銘氏来る」の記事のほかに、辜鴻銘の日本語訳された寄稿文が2回、「『辜鴻銘講演集』評」¹⁸、そして「逝ける辜先生」¹⁹とする特集記事が見られる。同特集には大東文化協会関係者らによる辜鴻銘との思い出が綴られている。

同誌に「碩学辜鴻銘氏来る」が掲載されたのは、『大東文化』1924年11月号（第一巻第九号）であった。そこには招聘に至る経緯や思想まで比較的詳細な紹介が次のようになされている。「本協会の招聘に応じて支那現代の碩学辜鴻銘氏の来朝されたことは吾等同人の深く喜ぶ所である、東京日日大阪毎日両新聞社の講演を得て去る十四、十六、十八日の三日間は本協会の講堂に於て、二十日は丸の内商工奨励館講堂に於て氏の講演を開催した」と説明している。また、辜鴻銘による講演は「何れも満場立錫の余地なき盛会裡に終を告げ聴衆に多大の感動を与へた」²⁰という。これら講演の内容は公刊予定であり、全国紙がすでに辜鴻銘の来朝理由や来歴などを紹介しているので多くの人に周知されているとしつつ、その略歴とともにさらに紹介して、「氏は孔子学説に於て支那第一流の学者

たるのみならず年少にして英独に遊んで泰西科学の精華を学び更に、また国婦人を娶て（特に貞淑なる婦人にして名を吉田貞子といふ、氏は著書に於て講演に於て今尚ほ夫人を偲ぶ逸話を以てすることが多い）その婦人を通じて武士道その他我が国固有の道德を知り且我が国の典籍にもよく精通してをる所謂学東西に渉り、識古今に通ずる達観の士」²¹と評した。こうした紹介文からも大東文化協会は東西文明の長所を強調するとともに、「道德」としての孔孟思想を広めることを主目的として辜鴻銘を招聘したことがわかる。特に維新以降、西洋を模倣しつつ進む近代化を「物質文明」として否定する思想が大正期に至って広く浸透していたなか、大東文化協会の理念と辜鴻銘による「支那の文物制度の保存」思想とが共鳴していったのであった。革命前の中国は辜鴻銘を「蛮カラ」と見なし、革命後の中国は「保守的であり寧ろ反動的な人間である」と見なしたため祖国において思うように重用されず、「真の支那人」としての辜鴻銘の立場を理解するのは日本人であり、そのなかでも特に大東文化協会こそが適任であるとの考えに至って同協会による招聘が進められることとなったのであった。大東文化協会は、「此の秋この際学問上思想上兄弟の国である日支両国民の精神的結合を力説せんとする辜鴻銘氏を我が帝都に迎え得たことは吾等同人の最も欣快とする所である」「我が国の思想界に影響を及ぼす所決して些少ならずと信ずるのである」²²としている。

辜鴻銘の雑誌『大東文化』への寄稿の一つ「支那文明の復興と日本」は、『大東文化』1924年7月号（第一巻第五号）に「雑録」として掲載され、もう一つの寄稿文「支那文明の真価」は、翌25年11月号（第二巻第十一号）に掲載された。これら2つの論稿は、講演会や著作のなかで多く取り上げられたテーマであり、支那文明を「偉大なる文明」「予は支那文明の魂を擁護したい」との持論を展開するものであった。

掲載されたこれら2本の論稿には共通して、日本が「支那より継承したる支那文明の神髓」を持する国であることが強調されている。また、前者は来日前の同年7月に掲載されたものであるから、朝鮮総督のもと

へ訪れ齋藤らとの邂逅によって招聘の動きが出ることとなった9月よりも前に機関誌へ掲載されていたということになる。すでに大東文化協会では辜鴻銘への関心が高まっており、先んじて招聘の動きがあったのかもしれない。同論稿のなかで辜鴻銘は、「教育ある支那人に取りてローヤルティ即ち忠、及びフィリアル、パイエティー即ち孝なる文字は乾きたる死せる文字となりたれば也、然れども日本の教育を受けたる人々即ちサムライ（士）に取りては支那文明のスピリチュアル、フオウミュレー即ち尊王攘夷の文字は真にその精神（リーアル、ミーニング）を保ち居たりし也」²³と日本を評価している。

一方、後者の「支那文明の真価」は、再来日後の一連の講演会を終え、掲載された論稿である。「欧米に於ける凡庸の徒は我等支那人ならびに日本人を文明に遅れたる民族と見做している。彼等は成金国民であるからだ」²⁴と始まる文章は、冒頭からかなり端的な表現を用いて欧米を断じる。対して中国および日本については「実に支那文明は偉大なる文明である。社会、国家に道徳的基礎があるからである」²⁵とし、道徳的基礎とは「君臣の關係は大義名分に基き、父子の關係は愛情、夫婦の間は服従に基礎づけられる」ものであると持論を展開する。数千年にわたり築かれてきた「真正の文明」は、西洋文明に迎合できるものではなく、むしろ西洋文明は東洋文明を破壊するものであるとする。ただし、辜鴻銘は「支那」を中心とする東洋文明の優れた点を主張しつつも、東西文明の融合は可能であるとの説を抱いていた。そのため「(欧米の) 有識者は決して吾等を文明に遅れてゐるとは考えてゐないのが明らかであらう」²⁶とし、「欧米を模倣して支那文明を滅却」²⁷しようとするのは誤りで、双方が「平等なる待遇」を対等に築くことが必要との考えを示していたのであった。大東文化協会は東西両文明、文化の融合を掲げていたのであるが、その点において辜鴻銘を評価し期待を抱いて招いたのであらうと推察することができるのである。

3. 日本での講演行程記録

1924年10月に来日した辜鴻銘の講演会の行程について、あらためて整理しておこう。財団法人大東文化協会の主催、東京日日新聞社および大阪毎日新聞社2社の後援で実現した一連の「講演会」のうち、最初の3回は大東文化学院講堂において、10月14日「文化とは何ぞや」、同月16日「支那文明の史的進化」、同月18日「日本の将来」と題して開催された。同月中に東京市内数ヶ所で講演を行った後に関西地方へ移動し、大阪毎日新聞社講堂をはじめとして各地を次々に巡っており、大阪のほかには京都、神戸、浜松などで講演を行った。浜松では実業家の細井鉄郎宅に宿泊したようである。

大東文化学院講堂において行われた「辜鴻銘講演会」は、学院生や大東文化協会関係者が主対象であった。3日間とも異なるテーマを講じた後、同月20日には丸の内商工奨励館（現在の東京国際フォーラム）において東京市民を対象とした「辜鴻銘東京一般講演会」を実施している。そこでのテーマは「東西文明の異同を論ず」であった。さらに東京帝国大学講堂において「中国文明の復興と日本」と題した講演も実施した。関西地方へと移動した後、まず大阪市民を対象とした「辜鴻銘大阪講演会」として大阪毎日新聞社講堂において「ポリチカルエコノミーの真諦について」というテーマで講演している。これらの講演テーマはそれぞれ異なるものであったが、直前まで推敲を重ねたうえで壇上に上がるのが常であったとされる。大阪や京都などすべての講演活動を終えると、同年11月16日に日本を発って同月18日に台湾へ戻った。

帰国時にはすでに日本に定住する意志を固めていたとされ、半年ほどかけ移住の準備を進めた後、1925年4月末に妻子をともなって再来日し、5月1日に東京へと到着した。前述したように、再度の来日と日本定住にあたり、辜鴻銘には大東文化協会名誉会員および大東文化学院臨時教授という肩書きが用意された。

東京へ到着した翌日の1925年5月2日より早速講演活動を再開し、同

日は「文化とは何ぞや」と題する講演を東洋協会大学（現在の拓殖大学）講堂で行った。前年に大東文化協会講堂で行った初日の講演と同一テーマを掲げており、内容もほぼ同じであった。また、同日は薩摩雄次が壇上に上がり「孔子教と辜先生」と題して辜鴻銘の紹介を行うとともに、講演の通訳をつとめている。

同年5月中は「東北五県巡回講演会」（以下、「東北巡講」）も実施しており、「東北巡講」は全国紙で連日報道がなされるほど盛況であった。東北五ヶ所を巡ったこの講演は、先の東洋協会大学と同一のテーマ「文化とは何ぞや」で行われている。同一テーマを掲げていたが、辜鴻銘はこの間の講演中も毎回推敲を重ねるのが常であり、「原稿が出来ないうちは食事も睡眠もとれなかった」²⁸という。「東北巡講」の実施日と実施場所は次のようであった。

「東北五県辜鴻銘先生巡回講演会 『文化とは何ぞや』」

5/21 仙台市公会堂（現在の仙台市民会館）

5/23 盛岡商品陳列所（現在の地方独立行政法人岩手県工業技術センター）

5/25 青森県女子師範学校講堂（現在の弘前大学教育学部の前身校の一つ）

5/26 秋田県記念館（現在の秋田県民会館）

5/27 山形県会議事堂（現在の山形県郷土館）

なお、これら講演内容については、修正のうえ日本語訳されたものが大東文化協会編『辜鴻銘講演集』（1925年2月）として大東文化協会出版部より刊行された。ただし、同書中で「文化とは何ぞや」が「教養とは何ぞや」と変更されていたり、あるいは「文化的教養とは何ぞや」としたりしている箇所もあって不統一である。同書に掲載されたのは「教養とは何ぞや」のほか、「支那文明の史的進化」「日本の将来」「東西の異同を論ず」「ポリチカル・エコノミーの真諦に就て」「（附録）綱常名教定國論」であった。

さて、「東北巡講」は毎回大盛況であった。特に東京日日新聞は同年5月22日から29日まで連日講演の様子を逐一伝え、「東洋文明の真髓は今日の日本に見る」とする辜鴻銘の説とともに、満席となったうえに立ち見の聴衆が周囲を埋め尽くし、二階まで満員の様子の講堂の写真を添えて報じている。さらに同紙は、「仙台についに支那碩学辜鴻銘翁」「辜鴻銘とは如何なる学者なるか」²⁹と紹介し、翌23日にも「東方文明の偉大を知りたいならば『今日の日本を見よ』」「碩儒辜翁の大獅子吼」、24日は「深い印象と大なる教訓を…残して辜鴻銘翁盛岡へ」との見出しを添え、仙台での講演の好況ぶりを伝えている。なお、東北から帰京の途中、張作霖からの要請があり一時的に満洲へわたり会談したが、同年7月には日本へと戻った。

日本へ到着するや講演活動を再開し、1925年7月19日に行われた「東方文化振興大講演会」において「政治と社会との道徳的基礎」を講演、このときの通訳は竹内泰がつとめた。講演会場は大東文化学院講堂で、7月13日から18日まで同講堂では「大東文化学院夏季講習会」が行われており、辜鴻銘がその最後に講演を行うことは同夏季講習会を締める役割もあったのであろう。

その後、1927年までの活動に関する資料は極めて乏しくなっており、いくつか断片的な記録が残るのみである。1927年7月に台湾経由で中国北京へ帰国、同年9月より山東大学学長に就任、翌年4月30日に北京市内で死去した。

辜鴻銘に付き添っていた薩摩雄次は、辜の秘書的な役割を果たした人物で、日本での活動においてほぼ全行程に同行した。薩摩は1897年12月、福井県大飯郡本郷村（現在のおおい町）で農業を営んでいた薩摩三蔵の次男として生まれた。1923年3月に拓殖大学支那語科を卒業、戦後の1952年4月より同大学友会副会長を2年余りにわたりつとめ、さらに1955年から4年間ほど同大学評議員にも就任した。資料によって拓殖大学教授や第三高等学校（現在の京都大学の前身校のひとつ）卒業、北京

大学卒業あるいは同大学予備科卒業などの経歴も見られるが、これらについては事実として確認できない。拓殖大学に残される学籍簿の記録³⁰によれば、学歴としては1914年4月京都府私立京都予備学校中学科入学、翌年3月に同校退学、1916年4月に東京府私立赤坂中学校へ編入学し、1918年3月に同校を卒業した。同年に徴兵され、兵役後の1919年4月に拓殖大学へ入学した。大学卒業後、大東文化協会副会頭であった政治家の小川平吉の秘書となり、同時に大東文化協会幹事に就任した。つまり辜鴻銘に同行したのは協会幹事としての仕事の一環であった。中国語が堪能であったこともあり、以降、辜鴻銘の絶大な信頼を得て日本滞在中は台湾の往復を含めてほぼ全行程に同行した。

辜鴻銘に付き添い同行した人物には、薩摩雄次のほかに、ジャーナリストの小野賢一郎³¹がいた。小野が辜鴻銘について書き残しているのは、「東北巡講」に同行したときの印象に残った出来事についてである。「大正十四年五月下旬、先生のお供をして東北地方巡講の途についた」「先生の講演は主として『デモクラシイとは何ぞや』『政治及び社会の道德基礎』『デモクラシイと東方文明の真精神』といったやうなもので、その博識、いかにも学者的な敬虔な態度と幽玄詩の如き熱弁には聴衆はいつしか陶醉境に牽き入れられて異常な感銘を受けたのであつた」³²とある。そのほか同短文には興味深い描写がいくつもあり、「青森の女子師範の講堂は聴衆でぎつしりになつた。師範生も聴講してゐた。時間が来たので先生は講堂に入りかけられたが、クルリと踵を返して控室に入るなり、『私の講演をやめます』といはれる。私たちはびつくりした。よく伺うと『十二、三の女の子が沢山ゐるではないか、自分の説かうとするところはあんな子供に解かる筈がない。自分の姿に興味をもつて来たのぢやないか』と弁髪を示された。そこで私どもはさうではない、女子師範の生徒で将来人の師たるものであります。小さく見えるのは袴を短かくはいてゐる為めであると、学校の教師も口を添え説明した。すると先生は『さうか、よくわかつた』と御機嫌が直つて却つていつもより長く講演されたかと

思ふ。ここいらは如何にも学者らしいところである」³³と回顧し、同日の青森から秋田へ向かう汽車の中で乗客が先生であることを知って敬意を表すると、先生も非常に喜んだとしている。一方、秋田から山形に向かう途中、横手で乗り込んできた「某画家と山田順子」の「人もなげなる近代ぶりは痛く先生の気持を悪くしたものらしい。『ハイカラにつける薬はない』と二三度声高にくり返された。お供の私共二三人、顔を見合わせたことであつた」とあるから、東北に同行していたのは薩摩と小野のほかにも何人かいたようである。

「1924年の渡日と翌25年の再来日を契機にした辜鴻銘に対する歓迎ぶり」、「多くの新聞報道がなされ」³⁴たとされるように、辜鴻銘が来日する前後、日本ではすでに「辜鴻銘」という存在はブームのような状況となっていた。来日の3年ほど前に芥川龍之介が紹介したこともきっかけの一つであったが、たとえば雑誌『女性』第八巻第壹号（プラトン社、1925年7月1日）には辜鴻銘の論説が日本語訳されて掲載されているなど、一般大衆にも知られるようになっていた様子がうかがわれる。また、前述のように「東北巡講」の様子が地方紙でも大々的に報じられたこともあり、日本滞在中には地方の人々も含め全国的に知名度が上がっていたのであった。

4. 辜鴻銘の講演内容と発表論稿

では、辜鴻銘は日本での講演において、なぜ上のようなテーマを選んだのだろうか。その思想には来日以前と以後とで変化は見られたのだろうか。結論から言えば、その確固として抱いた主張には大きな変化は見られなかったようであるが、「辜鴻銘自身、『日本』を射程にいれることによって自らの東西比較思想を豊かにし」³⁵たとされる。辜鴻銘は東西文化の融合は可能であると考えており、「東は東、西は西」とする言葉を残したことで著名なイギリスの小説家ラドヤード・キップリングの、東西が未来永劫融合することはないとするいわゆる「東と西のバラッド」に反対の立

場を表明していた。また、物質的な力をもって文明が進んでいくなかで、辜鴻銘の考える人間の激情を統制するよりよい方法が「道徳力」(moral force)であった。辜鴻銘はすでにキリスト教も道徳力としては無力になっており、近代化のなかでヨーロッパは軍国主義となったと理解する。また、「わが住むところは皇室中心の国家あるのみ」と公言していたので、当時の日本は理想的な国家の一つであったのだろう。

大東文化協会より1925年に刊行された『辜鴻銘講演集』には、辜鴻銘が日本で行った講演の内容のほぼ全てを日本語訳し掲載していると見てよいだろう。同書には、「教養とは何ぞや」「支那文明の史的進化」「日本の将来」「東西の異同を論ず」「ボリチカル・エコノミーの真諦に就て」「綱常名教定國論」の6つの論稿を読むことができるが、最後の「綱常名教定國論」のみ中国語での掲載となっている。

「教養とは何ぞや」では、文化的教養を得る方法、いかに文化的教養を必要とするかについて述べたものであるが、これは辜鴻銘の講演で特に多かった「文化とは何ぞや」と同一のものであり、本来は「文化的教養とは何ぞや」とする主題であった。つまり、「文化」において「教養」がいかに大事であるかを述べたものであった。「真の教養」とは「世界、即ち、存在に対する系統立った科学的智識を有することと云ふ意味」であり、「存在」とは「天地人」であり、「天地人」とはつまり神、自然、人生によって成立するものであるとした。続いて、いかにして教養を得るか、なぜに教養を要するか、について述べるところによれば、「無関心」「謙讓」「単純生活」の3点を挙げ、教養の習得には無心であるべきで、愛国心などを念頭から離し余念なくつとめること、簡素にして原始的生活であっても優秀なる文明国民であることが可能となると説いた。

また同文中の冒頭では、自己紹介として「支那に於ける私の同胞は私を認めて呉れません。私が如何なる種類の人間であるかと云ふ事に就いて、彼等は皆間違った考へを持つてゐるから、私を度外視して居るのであります」³⁶と述べている。また、「欧羅巴で教育されて居りましたから、

東洋人の儀容礼讓に習熟することが出来なかった。日本の方々に云わせると、少々『野蛮』であるのは實際らしい³⁷とも自己評価している。このような背景もあり、講演を終えるにあたって、「日本に来て大東文化協会の如き団体のあるのを見て真に欣幸に堪へないのであります。それは日本の有識者が日本及び東亜の将来の運命を重商主義、産業主義、若くは軍国主義に依らずして、教養によつて開拓しようとして居らるるからであります」と大東文化協会を評価したのであった。

なお、前述したように、『辜鴻銘講演集』を抜粋した内容である『辜鴻銘論集』が1941年に薩摩雄次編によって刊行されているが、こちらは辜鴻銘『支那人の精神』（中国の原書では『春秋大義』と題した）³⁸も含む内容となっている。『辜鴻銘講演集』は辜鴻銘が同時期にどのような思想を有していたのかをよく表わしており、後者はそれらを抜粋してまとめ直したものであるが、薩摩雄次を介して日本人にどのような影響を与えたのかを推察することができる。

また、雑誌『大東文化』第二巻第四号（1925年4月号）には、『辜鴻銘講演集』に対する新聞雑誌の批評一班」を見ることができる。ここには辜鴻銘から寄せられた同年2月27日付の書簡も掲載されている。ちょうど日本定住の準備のため一時帰国していた時期で、「木下先生閣下」から始まる書簡の木下は大東文化協会理事で実質的な設立者とされる北海道出身の政治家、木下成太郎のことである。「一たび病体の元に復するを待つて」とあるので、何か体調を崩していたようであるが、自らの著書が日本で刊行された感謝と喜びを綴るとともに、「再び首途を行ふことを。乞ふらくは、此意を將つて諸同志に伝達せられむことを」と来日を期している。

最後に『EX ORIENTE』に掲載された論稿を紹介しておこう。『EX ORIENTE』（エクス・オリエンテ）は、かつて大東文化協会比較研究部が機関誌として1925年4月に創刊した雑誌であり、英仏独の三ヶ国語のうち、いずれかで執筆された論文のみを掲載し、欧米諸国へ向けて、東洋

文化に関する最先端の研究成果を知らせたいとの目的で発行されたものである。刊行されたのは1926年7月発行のVol. II - III（合併号）までであり、以降は継続されなかった。この合併号に、「Ku Hung-ming」として辜鴻銘の論稿“CIVILIZATION AND MONARCHY: or THE MORAL PROBLEM OF THE FAR EASTERN QUESTION”が掲載されている。訳せば「文明と君主制 または極東問題の道徳的課題」となる同論文は、辜鴻銘が1901年に発表した初著書『尊王篇』の末尾に掲載された同著の総括部分とほぼ同内容であったが、『尊王篇』では“CIVILIZATION AND ANARCHY”となっており、こちらは「MONARCHY」の誤植と思われる。来日時における講演内容がすでに同著において提起されていたことを付記しておく。

同論稿において辜鴻銘は、「極東問題」とは道徳であり、宗教にこそあると考えている。西洋において宗教観にもとづく中世の十字軍遠征がおきたとき、東方民族は蹂躪されることとなったがそこには道徳的な意図や機能が見られた。一方でフランス革命以降の「現代」においては中世とは異なり自由主義が横行し、中世までの制度を解体しようとしている。問題設定の前提としては、この現代と中世との衝突が国際問題となり、ひいては極東の道徳問題となっているとする。また、東西文明を貫く「道徳」問題の解決にあたっては、古代よりの中国文明の価値が高く評価されるとする。ここでの「道徳」とは“moral sense”“moral life”のいずれも含み、「道徳力」とは“moral force”である。日本は「支那」と文化的につながるため「道徳」的に優性であるとする。なお、『支那人の精神』によれば、「道徳」とは責任感であり、それを認めそれに従うことでもあるとしている。道徳により社会の秩序は支えられ、保たれるとし、ひいては文明、人類社会の存在を成功に導くものである、と定義したのであった。

おわりに

辜鴻銘の生涯や中国伝統文化を尊ぶ思想形成において、行政官となり

20代から40代の時期を過ごしたことは重要な意味を持っていたが、辜鴻銘自身が「支那に於ける私の同胞は私を認めて呉れません。私が如何なる種類の人間であるかと云ふ事に就いて、彼等は皆間違った考へを持つてゐるから、私を度外視して居る」と述べている通り、当時の中国国内で高く評価されたとは言えなかった。そのため、60代になって日本で高い評価を受けて来日を歓迎されたこと、講演の機会や著書の刊行がなされたことは辜鴻銘の研究内容を後世へ伝える点でも重要な意味を持った。「欧羅巴で教育されて居りましたから、東洋人の儀容礼讓に習熟することが出来なかった。日本の方々に云わせると、少々『野蛮』である」などと自己評価しつつも、日本の講演においては自説を存分に展開していた様子がうかがわれ、新聞報道から見てもおおむね好評であったと見てよいだろう。一方、日本滞在中は「幕僚」としての自身の活動経験について触れることはほぼなかったようである。

辜鴻銘が来日を決めた背景として、亡妻を偲びその故郷を見ることと同時に、「日本に現存せる唐宋文化」の研究を行うことを目的としていた。一方、大東文化協会は、儒教は本来我が国のものではないが、「流入既に三千年を経て我が国体と融合し国民道德の根本をなして」おり、「彝倫を扶掖し綱常を維持するの途は之を鼓吹し振作するを以て他には絶無であると信ずる」とし、それ等の意味からして、支那現代の大儒辜鴻銘を招聘したいと考えたのであった。つまり、大東文化協会は東西文明それぞれの長所を強調するとともに、「道德」としての孔孟思想を広めることを主目的として辜鴻銘を招いた。これらの点において辜鴻銘を高く評価し、講演活動を含め活動の場を提供し、辜鴻銘もそれに応えたのであった。辜鴻銘はやや奇抜な思想を持っていたと評価される向きがあるが、日本における講演内容やそれをもとに刊行された『辜鴻銘講演集』は大東文化協会からの期待に応えたものであったと言える。中国伝統文化を自説によって誇張する傾向は見られたものの、道德による社会秩序の維持や文化の継承など、伝統的な教養を伝えることを自身の責務と認識してい

たことがわかる。中国古典に学び旧来の漢学者の要請をあらためて行いたいとする大東文化協会および大東文化学院の趣旨や大陸理解へを深めたい当時の日本社会の世相に、辜鴻銘の思想は合致したのであった。

辜鴻銘は1924年の来日時は主として東京と関西地方を巡り、1925年の来日時は特に東北地方での講演を精力的に行ったことが注目される。この間、通訳兼秘書としての役割を担った薩摩雄次や同行した小野賢一郎らの手記からは、辜鴻銘を慕っていたことがわかる率直な印象を読み取ることができる。また、交わした会話も断片的に記されており、人物像もより具体的に知ることができるものであった。ただし、1925年5月に来日した直後に行われた「東北巡講」以外の活動についてはほとんど資料が残されておらず、また死去後に寄稿されたこれらの手記にも1926年から27年の活動についてはほぼ触れられていないため、およそ2年間の動向のすべては明らかになっていない。また、日本に永住する覚悟もあったとされる辜鴻銘であるが、1927年7月に日本を離れることになった理由が山東大学学長就任にともなうものであろうと推測されるものの、その詳細は明らかではない。

なお、大東文化協会副会頭であった江木千之が招聘の中心的役割を果たしたが、朝鮮総督であった齊藤實と江木との関係は政治の上ではほとんど見当たらない。どのような経緯によって辜鴻銘の招聘が実現していったのか、この間のさらなる詳細究明についても今後の課題として残されている。

1 辜鴻銘の生涯を称して「生在南洋、学在西洋、婚在東洋、仕在北洋」とすることがある。

2 オーナーの「フォーブス・ブラウン」、あるいは「ボルプス・スコット」。スコットは作家ウォルター・スコットの血縁者であったという。

3 張之洞は中国清末の政治家。洋務派官僚として富国強兵、殖産興業を唱え、洋務運動を推進した。

4 辜鴻銘「東西精神文明の真価」『外交時報』478号、外交時報社、1924年11月。

5 『支那人の精神』目黒書店、1940年12月20日。序文に芥川龍之介「支那遊記」があり、

辜鴻銘との邂逅の思い出を寄稿している。

- 6 鷺澤與四二（吉次とする場合もある）は、明治期から昭和前期のジャーナリスト・実業家であり、1932年からは衆議院議員もつとめた。1883年に長野県に生まれ、旧制上田中学を卒業後は慶應義塾大学部政治科へ進学した。中学から大学まで在学中は野球部のマネージャー（監督）を熱心につとめた。1908年に大学を卒業すると慶應義塾大学部教員を経て、1909年11月より時事新報社北京特派員として中国に長く滞在し、その間、1919年に英字新聞『ノース・チャイナ・スタンダード』を創刊した。1956年没。
- 7 齊藤實は、周知のように第30代内閣総理大臣であるが、その生涯は海軍軍人としてのキャリアが中心である。1858年に岩手県に生まれ、海軍兵学校へ進学、海軍大臣や海軍大将など歴任した。1914年にシーメンス汚職事件により海軍大臣を引責辞任したものの、1919年より1927年まで朝鮮総督をつとめた。1927年にジュネーブ海軍軍縮会議の主席全権をつとめた後に退役し、1929年より1931年まで2期目の朝鮮総督に就任した。朝鮮総督を依願免官した後、1932年に内閣総理大臣となり、兼務して外務大臣にも就任した。「帝人事件」で総辞職したのち、内大臣となり、1936年の「二・二六事件」で暗殺された。
- 8 娘を伴って来日したとも、妻子を伴っていたとも言われる。
- 9 雑誌『女性』第八巻第壹号（1923年7月1日）には、辜鴻銘からの寄稿が掲載されている。「支那女性の典型」と題した論稿は日本文に訳されたもので、そこには中国人女性とは犠牲をいとわず無私を貫き男性に仕え「妾」であることも受け入れ、「妻には已に業に私が無い。没自我的である。犠牲に生きている。夫が他の女を家庭に引入れて来ても妻の感情が傷つけられようとはしないのである」と書いている。「妾を蓄へるのは、制度として賞すべきものがあると云ふのではないが、制度としてそれが成立してゐるところに、支那女性の尊い犠牲的精神が働いてゐるのである。支那女性の無私的美徳があればこそ、他の想像するが如く不道德なるものにならないのである。法律上では支那とて一夫一婦主義である。」（8ページ）、「制度の可否は姑らく問はず、支那女性の無私なる生活態度は、欧米人にとって不可解なる程度にまで、この蓄妾制度を醇化してゐるのである。」（9ページ）等々と述べている。これは辜鴻銘による中国の理想的な女性像を述べたものであったが、当時の日本人女性に果たしてこのような思想が受け入れられたのか、大正期の日本女性の活動家たちの動きに鑑みても疑問が残る。ただし、掲載された同誌の「あとがき」には、「『支那女性の典型』によって私達は真の支那の淑女を了解しました」と書かれている。また、『支那人の精神』中には「中国の女性」という章があり、同様の内容が記されている。
- なお、プラトン社から発刊された雑誌『女性』は1922年に創刊され、婦人雑誌としての性格のみならず本格的な文芸誌として、プラトン社が廃業する1928年5月まで毎月刊行された。『女性』第八巻第壹号（1923年7月1日）には辜鴻銘の論稿ほかにも、正宗白鳥「ホテル生活」、武者小路実篤「彼等と彼女達」、志賀直哉「赤い帯」、佐藤春夫「恋し鳥の記」など錚々たる作家の作品が並び、谷崎潤一郎「痴人の愛」は同誌同号において完結している。雑誌『女性』には与謝野晶子や泉鏡花、大佛次郎など著名な作家の寄稿が多数あったことで知られ、加えてタイトルロゴを含む装丁デザインを図案家・山六郎が担当したことでも注目された。その斬新なロゴ書体を含むアールデコ調の表紙は一世を風靡し、山の出世作となった。
- 10 芥川龍之介「辜鴻銘 —『支那游記』より—」、辜鴻銘著・魚返善雄訳『支那人の精神』

- 目黒書店、1940 年、2 ページ。
- 11 薩摩雄次「何処か寂しかった辜先生」（「逝ける辜先生」）大東文化協会編『大東文化』第五卷第六号、1928 年 6 月、93 ページ。
 - 12 同上。
 - 13 大東文化大学創立五十周年記念史編纂委員会編『大東文化大学五十年史』大東文化学園、1973 年、138 ページ。
 - 14 『大東文化大学五十年史』142 ページ。
 - 15 江木千之「東洋文化の振作 ―辜鴻銘氏を招聘した理由―」『大阪毎日新聞』1924 年 10 月 12 日。
 - 16 『辜鴻銘講演集』大東文化協会、1925 年 2 月、1 - 2 ページ。
 - 17 『大東文化』第一卷第九号（1924 年 11 月号）、164-168 ページ。
 - 18 『大東文化』第二卷第四号（1925 年 4 月号）、144 ページ。
 - 19 「逝ける辜先生」『大東文化』第五卷第六号（1928 年 6 月号）。
 - 20 『大東文化』第一卷第九号、164 ページ。
 - 21 同上、165 ページ。
 - 22 同上、168 ページ。
 - 23 『大東文化』第一卷第五号（1924 年 7 月号）、157 ページ。
 - 24 『大東文化』第二卷第十一号（1925 年 11 月号）、20 ページ。
 - 25 同上、25 ページ。
 - 26 同上、20 ページ。
 - 27 同上、24 ページ。
 - 28 小野賢一郎「東北の旅を憶ふ」（「逝ける辜先生」）『大東文化』第五卷第六号、1928 年 6 月、90 ページ。
 - 29 『東京日日新聞』1925 年 5 月 22 日。
 - 30 「東洋協会専門学校生徒学籍簿」、拓殖大学所蔵。
 - 31 俳人の小野燕子の本名。小野は小学校代用教員を経て大阪毎日新聞社へ入社、記者のほかには東京日日新聞社社員として連載小説をいくつか執筆しており、同時に俳人としてもすでに活躍していたが、小説家として独立することは終生せず、同新聞社の社会部長として永年勤め上げた人物である。1943 年に 54 歳で死去しているが、その晩年には日本放送協会の文芸部長や同業務局次長兼企画部長なども歴任している。
 - 32 小野賢一郎「東北の旅を憶ふ」（「逝ける辜先生」）『大東文化』第五卷第六号、1928 年 6 月、89 ページ。
 - 33 同上、90 ページ。
 - 34 川尻文彦「第二章 辜鴻銘と『道德』の課題 ―東西文明を俯瞰する視座―」『清末思想研究——東西文明が交錯する思想空間』汲古書院、2022 年。
 - 35 同上。
 - 36 『辜鴻銘講演集』、2 ページ。
 - 37 同上、3 ページ。
 - 38 中国の原書名『春秋大義』は、魚返善雄が翻訳し『支那人の精神』として刊行している。目黒書店より 1940 年 12 月 20 日発行された。日本で発行されたこちらの序文には芥川龍之介が序文として「辜鴻銘 ―『支那游記』より―」を寄せているほか、山口察常と諸橋轍次からの「序文」が寄せられた。

【Article】

Gu Hongming and The Daito Bunka Kyokai Foundation: His Two-Years Visit and Lectures at Japan

Nina Asanuma

Gu Hongming (1857-1928) was a Chinese born in British Malaya (Penang). In 1867, a British plantation owner was fond of Gu and took him, at age ten, to Scotland for his education. In 1873 Gu began studying Literature at the University of Edinburgh, graduating in the spring of 1877. He returned to Penang in 1880, and soon joined the colonial Singapore Civil service, where he worked as an official until 1883. Two years later, he went to China and served as an advisor to the high-ranking official, Zhang Zhidong, for twenty years. In 1915, Gu became a professor at Pekin (Beijing) University. In early 1924, he came to Japan for two years as a guest lecturer affiliated with the Daito Bunka Kyokai Foundation. Then he returned to Beijing, where he died in 1928 at the age of 72.

The purpose of this article is to scrutinizes Gu' activitie in Japan.